

中世スコットランドのアルト・カルト およびストラスクライド王国

—— アルト・カルト王国およびストラスクライド王国の始まり，
拡張期，衰退の変遷 ——

The Kingdoms of Alt Clut and Strathclyde in the Medieval Scotland

—— Its rise-up, Golden age and Decline ——

久保田 義 弘

要旨と概要

本稿では、初めに、5世紀から7世紀前半のブリトン人のアルト・カルト王国の成立・勃興からその衰退までを概観する。次に、本稿では、8世紀後半には、アルト・カルト王国はピクト王国の属領になり、また、ヴァイキングの侵攻後の10世紀初めに建国されたストラスクライド王国とその衰退を概観する。その侵攻後に、周辺国のピクト王国は、アルバ王国とその国土を拡張させ、その侵攻の衝撃を発展的に解消し、またウェセックス王国は、ブリテン島で覇権を掌握し、10世紀後半には全イングランドを統一した。その中で、強力な王権を持たないストラスクライド王国は、ヴァイキング侵攻で荒廃し、その侵攻後に強力な王のもとで統治されたピクト王国の属国とされ、11世紀にはピクト王国に併合されていたと推測される。本稿の最後に、アルト・カルト王国とストラスクライド王国におけるキリスト教の働きを一瞥する。

本稿の第1節の第1項では、古代カレドニア地域の民族や7つのピクト国と伝説上のヘン・オグレット（Hen Ogled）そして、ストラスクライド地域のブリトン人のアルト・カルト王国の勃興を概観する。

5世紀頃まで、4民族がそれぞれの部族王国を形成し、現在のスコットランドを割拠していたと考えられる。アルト・カルト王国は、ストラスクライド地域のケルト系ブリトン人によって形成された王国であった。5世紀から6世紀かけて、現在のスコットランドの南西部（ダンバートンシャー、グラスゴー、レンフルシャー、スターリング、フォルクカーク、エイシャー、ラナークシャー）のストラスクライド地域にブリトン人がアルト・カルト王国（Kingdom of Alt Clut）を形成し、その中心地をダンバートンの高台（Dumbarton Rock ; Alt Clut）

に置いたと思われるが、しかし、このことに関する明確な記録は発見されていない。

本稿の第1節の第2項の前半では、アルト・カルト王国の発生とその展開を概観する。

5世紀から7世紀の前半までは、その王国の西側に Scotti のダル・リアダ王国、その北側にピクト人のピクト王国、その東側にアングル人のベルニシア（ノーザンブリア）王国、その南側に他のブリテン人の王国（グウィネッツ王国、レゲット王国、あるいはエルメ王国などの王国）が活動していたと考えられる。アルト・カルト王国の第9代目エウゲン1世（在位不詳；7世紀中頃）までの国王は、その在位期間が確定しない王であり、伝説上の、あるいは、半歴史上の人物であると考えられる。特に、その関係がその王系図からブリテン人のアルト・カルト王国とダル・リアダ王国の関係、同時に、そのピクト王国との入り込んだ関係からぼんやりと見えてくるにすぎない。例えば、ダリ・リアダ王国のアイダーン王の西方への侵略を反映してアルト・カルト王国の王系図にダル・リアダの血が流れて来たと考えられる。

本稿の第1節の第2項の後半では、アルト・カルト王国がピクト王国の属領にされ、それに併合される過程を概観する。

アルト・カルト王国は、8世紀中頃ごろまではその勢力を保ったと思われるが、しかし、8世紀後半には、その勢力が削がれることとなった。『Annals of Ulster』には、780年に“アルト・カルトが燃える”と記録されている。また、『Symeon of Durham』によると、ピクト王国の王オエンガス1世（在位732年-761年）がノーザンブリアの王エズバートと連合し、アルト・カルトを包囲し、攻撃した（756年8月1日）と考えられる。ストラスクライド王国はピクト王国に臣従礼をした。

アルト・カルト王国がピクト王国の属国であったことは資料からも推測される。その第17代目エウゲン2世（在位不詳；8世紀後半）ならびに第18代目リデルホ（在位不詳；9世紀初め）の在位期間が不定で、2人の活躍を知らせる直接的な資料も見つかっていないこと、さらに、その第19代目ドゥムナグゥアル4世（在位不詳）が王であったことは『Harleian genealogies』のみで伝えられ他の資料にはないこと、また、『Chronicle of the King of Alba』には849年にブリトン人によってダンブレン（Dunblane）が燃やされたことの記録から、アルト・カルト王国が1世紀以上の間にわたってピクト王国の属領であったと考えられる。その第20代目アルトガル・マック・ドゥムナグゥアル（在位不詳；872年没）は、捕虜としてヴァイキングによってダブリンに連行され、872年にピクト王コンスタンティン1世（コンスタンティン・マック・キナエダ）（在位862年-877年）の扇動あるいは同意によってその地で殺害された。アルト・カルト王国は、確かに、870年にノルウェイ人でダブリン王国の指導者（王）のアヴラプ・コング（875年没）とイヴァール（873年没）に包囲され、掠奪されていた。

『Annals of Ulster』では、第20代王アルトガル・マック・ドゥムナグゥアルの資格としてストラスクライド王を用い、*rex Britanorum, Strata Claude* (ストラスクライドのブリテン王)と記録されている。彼は、ストラスクライド王と呼ばれた最初の王であった。国名が変更されていること、また政治の中心がダンバートンからゴーヴァンに移されていることから、ストラスクライド王国もピクト王国の属国になったと考えられる。

本稿の第2節の前半では、ストラスクライド王国がアルバ王国に従属されることを概観する。

『Chronicle of the Kings of Alba』によると、ストラスクライド王国の初代王ディフンヴァル1世あるいはドムナル1世(在位不詳; 908年から916年の間に没)がアルバ王国の王コンスタンティン2世(在位900年-943年)の治世下で死んだという報告から、ストラスクライド王国はコンスタンティヌス2世の治世下でもアルバ王国に従属していたと推測される。その第4代目王ディフンヴァル3世あるいはドムナル・マック・オーゲン(在位941年-973年)は、『Annals of Ulster』では、*Domnall m. Eogain, ri Bretan* (オーゲンの息子ドムナル、ブリテンの王)と呼ばれ、975年のローマへの巡礼の途上で死亡したと記録されている。

『Anglo-Saxon Chronicle』には、945年にイングランドの国王エドモンド1世(在位939年-946年)が全カンブリアを占領し、それをアルバ王国のマルコム1世(在位943年-954年)に両国の陸海軍での連帯を条件として貸し与えると記録され、945年にカンブリア王国はイングランドの領土で、スコット王(多分、アルバ王マルコム1世)に貸し与えられたと理解される。しかし、ドムナル・マック・オーゲンが最後の王であると決めることはできない。というのは、その第5代目マエル・コルム1世(在位973年-997年)がアルバ王国の王と共にイングランド王エドガー(在位959年-975年)と会った8人の王に中の1人であったことから、ストラスクライド王国は、独立した国であったと理解することができる。その第6代目はオーエン2世あるいはオーガン2世(在位不詳; 11世紀初めに活動)であった。

第2節の第2項の末では、ストラスクライド王国がアルバ王国への併合を概観する。

『Symeon Durham』によると、オーエン2世あるいはオーガン2世は1018年のカラム(あるいはコールズストリーム)の戦い(Battle of Carham (Coldstream))に参加した。ウェールズの年代記には、彼は1018年に死亡したと記録され、この戦いで彼が死んだかどうかは明らかではないが、しかし、1018年には、独立国としてのストラスクライド王国は彼の代で消滅したと考えられる。ストラスクライド王国は、スコットランド王ディヴィッド1世(在位1124年-1153年)の治世まで存続したと考えられる。彼の治世時に、ストラスクライド王国がアルバ王国の属領であったか、あるいは、独立した国であったかどうかは不明であるが、多分、アルバ王国の属領で併合されていたと推測される。

第3節では、アルト・カルトならびにストラスクライド両王国におけるキリスト教について

て概観する。

本稿で取り上げるアルト・カルト王国ならびにストラスクライド王国は、その地理的立地からも推察されるように、その周辺王国の侵攻に悩まされたと考えられる。これが、その王権の伸張を阻害した大きな要因であったと推測される。また、その他の要因として、この王国にはダル・リアダ王国のアイダーン王（在位 574 年？-609 年）、ノーザンブリア王国のアシルフリス（在位 593 年-616 年）、エドウィン（在位 616 年-633 年）ならびにオズワルド王（在位 634 年-642 年）などの王、あるいはピクト王国のオエンガス 1 世などのような強い統率力のある国王（支配者）が出現しなかったこともあげられる。このこともアルト・カルト王国およびストラスクライド王国が早い段階で歴史から消える要因であったと思われる。それでも、この王国は、同様の地理的条件にあったと思われるレゲット王国やエルメト王国などのブリテンの王国よりも他の王国による支配下に入るのは遅かった。その要因はよく分からない。それは、現時点では、ミッシング・リンクである。

（キーワード：カレドニア、アルト・カルト王国、ストラスクライド王国、ピクト王国、アルバ王国、ダブリン王国、ピクト王コンスタンティン 1 世、アルバ王コンスタンティン 2 世、オエンガス 1 世、イングランド王エドモンド 1 世、イングランド王エドガー、聖ニニアン (Saint Ninnian)、カンディダ・カサ修道院、聖パトリック (Saint Patrick)、聖ヴァンゴ (Saint Mungo) あるいは聖ケンティゲルン (Saint Kentigern))

はじめに

この稿では、アルト・カルト王国およびストラスクライド王国の勃興から、衰退・消滅までを概観する。5 世紀から 7 世紀の前半までは、その王国の西側にはアイルランド人 (Scotti) のダル・リアダ王国、その北側にはピクト人のピクト王国、その東側にはアングロ人のベルニシア（ノーザンブリア）王国、その南側には他のブリテン人の王国（グウィネズ王国、レゲット王国、あるいはエルメ王国などの王国）がそれぞれ活動していたと考えられる。そのため本稿で取り上げるアルト・カルト王国ならびにストラスクライド王国は、その周辺王国の侵攻に悩まされたと考えられる。これが、この王国の王権の伸張を阻害した大きな要因であったと推測される。また、その他の要因として、この王国にはダル・リアダ王国のアイダーン王 (Áedán mac Gabráin)（在位 574 年？-609 年）、ノーザンブリア王国のアシルフリス (Æthelfrith)（在位 593 年-616 年）、エドウィン (Edwin)（在位 616 年-633 年）ならびにオズワルド王 (Oswald)（在位 634 年-642 年）などの王、あるいはピクト王国のオエンガス王 (Óengus I)（在位 732 年-761 年）などのような強い統率力のある国王（支配者）が出現しなかったこともあげられる。このこともアルト・カルト王国およびストラスクライド王国

が早い段階で歴史から消える要因であったと思われる。それでも、この王国は、同様の地理的条件にあったと思われるレグット王国やエルメト王国などのブリテンの王国よりも他の王国による支配下に入るのは遅かった。その要因はよく分からない。それは、現時点では、ミッシング・リンクである。

アルト・カルト王国およびストラスクライド王国は、ノーザンブリア王国あるいはピクト王国に臣従し、それに従属し、8世紀後半にはピクト王国に支配されたと推定される。さらに、ヴァイキングの侵攻後に、強力な王権を持たないストラスクライド王国は、強力な王のもとで統治されたピクト王国の属国になった。ヴァイキングの侵攻では、ブリテン島の全ての王国は大きな打撃を受け、多くの王国がヴァイキングの侵攻で荒廃した。他の王国とは異なって、ピクト王国は、アルバ王国としてその国土を拡張させ、その侵攻の衝撃を発展的に解消し、また、同様にウェセックス王国は、ブリテン島で覇権を掌握し、10世紀後半には全イングランドを統一した。

第1節 ブリトン人とアルト・カルト王国

1.1 古代カレドニア地域の民族

スコットランドは、現在では、ブリタニア島（グレートブリテン島¹）の3分の1を占めている。スコットランド地域の民族（部族）に関する資料は、ローマ人占領時の紀元1世紀以降のブリタニア島に関するものが殆どである。5世紀頃には、スコット人²、ピクト人³、アングル人⁴、ブリトン人の4民族がスコットランド地域に居住していたと思われる。このころは、

¹ ユリウス・カエサル（Gaius Julius Caesar）（BC100年-44年）がBC55-BC54年にブリタニア島に侵攻したときには、ブリテンには2つの異なったケルト民族が居住していた。フォース＝クライド地峡を境に南の全島域に住んでいたブリトン人、その北にはカレドニア人が住んでいた。ブリトン人はケルト語（Pケルト語）の一種であるブリトン語を話していた。カレドニア人の言語は、不明であるが、ブリトン語に近い言語であったが、Qケルト語を話していたと思われる。

² スコット人のルーツは、現在のアイルランド北部のアントゥリムを中心とする地域に住んでいたアイルランド人であると考えられていた。ローマ人がブリタニアから退散した後に、彼らは、スコットランド西部のアーガイルに侵攻してきた。アイルランド人がスコット人の先祖に組み込まれていると言っても間違ではないであろう。

³ ケルト系ピクト人の先祖は、紀元前1,000年頃にヨーロッパ大陸から移住してきたケルト系ブリトン人あるいはスキト人であろうと言われるが、詳細は不明である。彼らには体に色を塗り付ける（刺青の）風習があったことから、彼らをローマ人が「pict（色を付ける）」人種とラテン語で呼んでいた。ピクト人は、カレドニア人の子孫であると思われる。

ピクト人は、ローマ人がカレドニア（古アイルランド語で森を意味する）と呼んでいた地域に居住していた。ピクト人は、その地域をアルバ（アイルランド語でブリトンを意味する）と呼んでいた。ピクト語は、ブリトン人が使用したブリトン語に関連している。

⁴ アングル人は、ドイツのリュウベック、キール周辺に定住していた古コバルト族の係属であると言われていた。5世紀にブリトン島に上陸し、ノーサンブリア王国（Kingdom of Northumbria）、マーシア王国

4 民族が互いに抗争し、その中の 2 民族が共同し 1 民族に対抗する民族間あるいは同一民族間での抗争の時代でもあった。4 民族の中で、スコット人がスコットランドという名称を定着させる中心的な民族になったと伝説的に考えられてきた。

属領ブリタニア州（現在のイングランド）を支配していたローマ人（ローマ帝国）は、121 年から 122 年ごろ、カレドニア地域に居住していたピクト族の南侵⁵を阻止するために皇帝ハドリアヌス (Publius Aelius Hadrianus)（在位 117 年-138 年）の命によって「ブリタニア版万里の長城」（ハドリアン・ウォール⁶）を築城した。これは、ソルウェイ湾 (Firth of Solway) からティン川 (Tyne River) の東海岸近くまでに横断する長城であった。この築城にも拘わらず、ピクト人の侵入は繰り返された。208 年にローマの武将セヴィルス (Lucius Septimius Severus)（皇帝在位 193 年-211 年）は、カレドニア北部のマリ湾まで海路で北上し、ピクト族領に侵攻したが、しかし、ゲリラ戦による抵抗にあって、戦果を上げることなく、イーボラカム（現在のヨーク）に引き上げ、そこで病没した。それ以降、カレドニアにローマ軍が侵攻することなく、ハドリアン・ウォールを境に南では、ローマ帝国の支配下での統治が行われ、その北は、北部ブリトン人とスコッティ (Scoti) の争いを含みながらも北部ブリテン人が優勢に北での統治を進めていたと思われる。

1.2 ストラスクライド地域のブリトン人の王国の成立：アルト・カルト王国

1.2.1 7つのピクト国と伝説上のヘン・オグレッズ (Hen Ogledd)

5 世紀⁷頃、現在のスコットランドには、4 民族がそれぞれの部族王国を形成し、その地域を割拠していたと考えられる。その部族の分布図であるが、現在のスコットランドの北部、

(Kingdom of Mercia) の王族はアングル人である。9 世紀にサクソン人のウェセックス王国 (Kingdom of Wessex) がブリテン島中南部地域を統一した。その統一した領土が後にアングルの土地と呼ばれた。これが「イングランド」の語源である。それは「アングル人の土地」という意味である。

⁵ ブリタニア総督ユリウス・アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola) (37 年生-93 年没) (在位 78 年-84 年) は、84 年のグラビアンズ山の戦いで勝利し、ローマの支配を「ハイランド線」まで押し上げたが、その後の退却命令により、アグリコラは不本意ながら退却した。

⁶ この城は、度々、侵入するピクト軍の侵入を阻止するために、ローマ皇帝ハドリアヌスによって築城された。またその 30 年後の 153 年には、ローマ皇帝アントニウス・ピウス (Antoninus Pius) (在位 138 年-161 年) の命のもとでブリタニア総督クイントス・ロリアス・ウルピカス (Quintus Lollius Urbicus) (在位 139 年-142 年) によって、スコットランド中部に、クライド川の河口に臨む西岸のオールド・キルパトリック (Old Kilpatrick) からフォース湾に臨むカリドン (Carriden) の東部にかけて 63 キロメートルの長城が築かれた。当時の皇帝の名を採って、それは「アントニウス・ウォール (Antonine Wall)」と呼ばれた。この長城の高さは、4 メーター、層状になった泥炭や土でできていた。これは石造りではなかったために、その姿を今日殆ど見ることはできない。3.3 キロメートルごとに城砦が設けられ、全部で 19 の城砦と 9 の小城砦が設けられた。

⁷ 紀元 1 世紀には、ブリテン島の南部には幾つかの王国が誕生していたと思われる。それらにはブリテン丘砦 (部族全体の避難所や首長の居住に使用されたと思われる) が残っている。

北東部あるいは中部からハイランド地域にはケルト系ピクト人が居住し、ピクト人は北部ピクト人と南部ピクト人からなっていた。『Duan Albanach』によると、ピクト人の土地には王を持つ7つの王国とそれに従属する多くの部族国があったと思われる。その7つの王国は、カイト(ケート)(Cait; 現在のケイネスやサザーランド)、ケ(Ce; 現在のマーヤパハン)、キルキンあるいはシルシン(Circinn; 現在のアンガスやマーン)、フィブ(Fib; 現在のファイブ)、フィダッハ(Fidach; 現在のストラスサーンやメンティスと考えられるが。確かではない。)、フォトラ(Fotla; 現在のアサル)、フォトリウ(Fotriu; 現在のマリーやロス)であった。その代表として、マリ湾の周辺で活動した北方ピクト人(フォトリウ)とストラスモア周辺で活動した南方ピクト人の大きな王国(シルシン、フィブ、フィダハ)があったと考えられる。この中で最も強力な王国として、フォトリウ(Fortriu)が成長したと考えられる。アイルランドの年代記では、フォトリウの王はピクトの王を意味した。

半ば伝説上の北部ブリテン人の歴史を記しておこう。北部ブリテンのヘン・オグレット(The Old NorthあるいはHen Ogledd)は、ブリトン人のいくつなの部族の集団であった。その中にはアルト・クライド王国を形成したブリトン人も含まれていたと推測される。北部ブリテンのコール・ヘン(Cole Hen)(350年生?-420年没?)は、『Harleigan genealogies』⁸に記されている。彼は、エボラカム(Eboracumu, 現在のヨーク)に中心を置いていた。彼の系図は、総称してCoelingと呼ばれ、彼から北部ブリテンの王家が生じた(派生した)と考えられる。例えば、この系図には、レゲット王国の王Urien ウリーン(Urien)⁹(在位550年?-590年)、エルメト¹⁰王国の王グウワロフ(Gwallog ap Llaennog)(在位560年?-590年)、

⁸『Harleigan genealogies』は、古代ウェールズ系図の収集物で、英国図書館に所蔵されている。これは、ハーレーの収集物の一部、『Annals Cambriae』を含む写本、および11世紀に編纂された『Historia Brittonum』の翻訳からなる系図の収集物から構成されている。

⁹彼の父は、キンファーフ・オエル(Cynfarch Oer)(在位期間不明; 6世紀)であった。彼の息子には、Argeon Llwyfainの戦いやアルカルト要塞の戦い(Battle of Alclud Ford)(580年頃)でベルニシア王国と戦ったオーエン(Owain mab Urien)(595年没)とその他に3人の息子と、庶子Ywain the Bastard(生没不詳)がいた。庶子の名はYwainであり、アーサー伝説のラウンドテーブルの騎士であったが、従兄弟のGawainに殺害された。

ウリーンの兄弟には、ロージアンを治めていたロト王(King Lot)(アーサー王伝説のロージアン王)とスコットランドを治めていたアングザル(Angusel)(生没不明)がいたという説がある。ロト王は、セント王国の王オクタ(Octa)(在位512年あるいは516年-534年あるいは540年)と戦うためにウザー・ペンドラゴン(Uther Pendragon)(伝説上のアーサー王の父親)の家臣になった。ロト王の妻は、アーサー王の姉妹アンナ(Anna)あるいはヴォルガウス(Morgause)であり、彼の息子Gawain, Agravain, Gaheris, Gareth, およびMordredがいた。この5人の息子は、アーサー王のラウンドテーブル騎士であった。

ウリーン王と彼の息子および彼の兄弟や彼の甥は、アーサー王伝説が形成される時代にブリテン王の一人として活動していた。

¹⁰エルメト王国は、5世紀から7世紀にかけて存在した東ブリテンであり、ローマ帝国に従属したブリテン王国(レグド、ストラスクライド、エブラウク、ブリネイハ、ゴドウィンなどのブリテン王国)の一つで

エディンバラ王国のクリズノ・エディン王（king of Clydno Eiddin）¹¹（6世紀後半に活動：在位期間不明）、573年のアルフズリズの戦い¹²（Battle of Arfderydd¹³）に参戦したグウルジ（Gwrgi）とペルドウル（Peredur）兄弟¹⁴などが含まれる。また、グウィネッツ（Gwynedd）

あった。現在のヨークシャーの西 Riding（リディング付近）に存在したと思われる。その境界であるが、南は sheaf 川、東は Wharfe 川であった。その北はデイラ王国に隣接し、その南はマーシャ王国に隣接し、その西の境界は Craven 王国に隣接していた。この王国もローマおよびローマ・ブリテン時代の the Old North（Hen Ogledd）の一部であった。この王国も Coel Hen の系統に属し、グウワロフ王（king of Gwallog ap Llaennog）（在位 560 年？-590 年）もその系統 Coeling に属していた。彼は、レゲド（Rheged）王国の王ウリーン（Urien）（在位 550 年？-590 年）や Morcant 王等と共にベルニシア王国のイダ王の息子の 1 人であったセオドリック（Theodric）（在位 572 年-579 年）の親子と戦い、リンディスファーンに彼らを 3 日間包囲した。この戦いはブリトン連合軍の敗北であった。その後、ベルニシア王国のセオドリック王はウリーンの息子オーエン（Owain）との戦いで殺害された。また、このころ、ウリーン王やオーエン王子と、ノーザンブリア王国のイダ王の息子（多分、セオドリック）との戦い（アルクルド要塞の戦い）がおこり、その王国のセオドリック王は殺害された。この王国は、616 あるいは 626 年にノーザンブリア王国に侵攻され征服された。その後、627 年に Elmet 王国はノーザンブリア王国に吸収された。その住民は Elmetsoete として知られる。600 hides の小領域であった。

この王国の存在は、『Historia Brittonum』で明らかである。そこには、ノーザンブリア王エドウィンが Elmet を征服し、その王セルテック（Certic）（619 年没？）を追放したと報告されている。この出来事は、616 あるいは 626 年に起こったと思われる。その戦いの理由は、Elmet に亡命していたノーザンブリアの貴族ヘレリック（Hereric）の毒殺にあったと思われる。この資料からでは、この毒殺に Edwin 王も関係していたと思われる。

¹¹ 彼は、『Harleian genealogies』によると、ストラスクライドのドゥムナギアル・ヘン（Dumnagual Hen）の孫である。彼の息子がキノン・エイディン（Cynon Eiddin）であり、エディンバラ王になり、600 年頃のカトリースの戦いに参戦している。クリズノ・エディン王は、580 年頃、ストラスクライド王国の王子エリディル・ミンファウル（Elidir Mwynfawr）がグイネッツのアフロン（Afron）で殺害されたことに対する復讐として、エルメト王国のグワログ王（king of Gwallog）およびビルネイフ（Bryneich）王国のモルガン王（king of Morcant）のブリトン人の王と共に、グイネッツ王国（Kingdom of Gwynedd）の王位を要求したグイネッツ王国のマエルグウィン王子ルン・ヒール（Rhun Hir ap Maelgwn）（国王在位 547 年-586 年）とアフロン（Afron）の Aber Mewydus（現在の Cadnant あるいは Battle Brook）で戦った。エイディン王達は敗北した。

¹² この戦いは、『Annales of Cambriae』に報告されている。その戦いの原因や戦闘経過などの詳細は、それには記されていない。彼らが争った敵対者は、ブリトン王のグエンドロウ（Gwenddolau ap Ceidio）（573 年没？）であった。グエンドロウは、ハドリアン・ウォールとカーライル辺りの地域（スコットランド南部、ボーダー）であったアルフズリズ（Arfderydd）を治めていたブリテン人であった。彼もコール・ヘンの末裔であったので、この戦いは、ブリテン人のローマ人撤退後のローマ支配領地の分割をもたらした一連のブリテン人の間の争い（戦争）の 1 つであった。この戦いでグエンドロウは敗北し、殺害された。グエンドロウはアーサー王伝説には取り入れられなかったが、彼の宮廷補佐役であったミルディン（Myrddin）は、アーサー王伝説の魔法使いマーリン（Merlin）のモデルになった。

¹³ アルフズリズ（Arfderydd）は、現在のカンブリア地方のアースレッズ（Arthuret）である。

¹⁴ この兄弟は、『Annales of Cambriae』によると、レゲド王国のウリーン王と従兄弟で、580 年に死亡した。この兄弟は、多分、『Annales of Cambriae』あるいは『Historia Brittonum』によると、ベルニシア王国との戦い（Caer Greuno の戦い）で命を落としたのであろうと想像される。この兄弟については伝説的な記録が多数残されている。たとえば、『Welsh Traids』、『Y Gododdin』、Geoffrey of Monmouth の『Historia Regum Britanniae』では、アーサー王との関係で卓越した騎士と Peredr を取りあげている。

王国の基礎を築いた王グネダ(Cunedda) (在位期間不明；5世紀に活動)は彼の義理の息子¹⁵である。グネダ王がグウィネズ王国の初代王であった。ニンニウス(Nennius) (809年没)の『Historia Brittonum』によると、グネダ王は、ピクトとの戦いに敗れて、彼の息子とその従者と共にマナウ・ゴドウィン(Manaw Gododdin；現在のクラックマナンシャー辺り)から、ウェールズの北部のグウィネズに移住した¹⁶。グウィネズの宮廷はDeganwy城であった。

1.2.2 アルト・カルト王国の揺籃期から勢力拡大：在位期間が不明な王の時代

多分、ブリテン島がローマ帝国の支配下にあるときから、北部ブリテン人は要塞を造り、ピクト人の侵攻をフォース湾とクライド湾の北側で押さえていたと推測される。すなわち、「アントニウス・ウォール (Antonine Wall)」の北側で、ピクト人の勢力を押さえ、併せて、スコッティ(Scotti)と呼ばれたアイルランド人の侵攻も押さえていたと推測される。しかし、5世紀の初めにローマ帝国がブリテン島を引き上げると、北ブリテン人とピクト人あるいはスコッティとの間の力関係は大きく変化し、ローマ帝国下の社会秩序が崩れ、新たな社会秩序(部族国間の関係)の形成に向けて、ブリテン人(国)の間での抗争があったと思われる。残念ながら、私が知る限りでは、その関係および抗争の詳細を明らかにする文献資料あるいは考古学的資料も発見されていない。以下では、断片的に知られる事実から、北ブリテン人によって造られアルト・カルト王国ならびにストラスクライド王国の発展・消滅とその周辺国との争いを概観する。

現在のスコットランドの南西部(ダンバートンシャー、グラスゴー、レンフルシャー、スターリング、フォルクカーク、エイシャー、ラナークシャー)のストラスクライド¹⁷地域に、5世紀から6世紀かけて、ケルト系ブリトン人がアルト・カルト王国(Kingdom of Alt Clut)

¹⁵ Coel Hen は、彼の娘 Gwawl と通じて、グネダ (Gunedda) の義理の親であった。

¹⁶ その他の説として、グネダ王はハドリアンウォールの南に進出するスコットあるいはピクトを押さえるために、ブリテン王ヴォルティガーン (Vortigern) (5世紀初めから半ばに活躍した神話上の人物) の指揮の下で北ウェールズに移動した。彼と彼の息子は、450年頃に、アイルランドの Uí Liatháin と Laigin などの侵入者を追放した。

¹⁷ ストラスクライド (strath は溪谷を意味する) という名前は、ヴァイキングがこの地域に侵攻し、その王国の首都であった「ダンバートンの岩 (Dumbarton Rock; Alt Clut)」が掠奪された後に使われた。それ以前はアルト・カルト (ダンバートンの岩) と呼ばれ、そこはブリトン語で「Ystrad Clud」と記録された。歴史的にはアルト・カルト王国の国境は明確に記録されていないが、その北端が Loch Lomond (ロモンド湖) であり、また、スターリングとロモンド湖の間の湿地帯もその国境であった。その南はクライド溪谷を遠く上って、エイアー辺りまで達していた。そこには、「the Old North (Hen Ogled)」の呼ばれたブリトン人 (Damnoii と呼ばれた人々) が住んでいた。「the Old North」は、「アントニウス・ウォール」の南側で、かつ、「ハドリアン・ウォール」の北側であった。そこは、かつて、ローマに従属していたブリトン人の北端であった。

を形成し、その中心地をダンバートンの高台 (Dumbarton Rock; Alt Clut)¹⁸ に置いたと思われるが、しかし、このことに関する明確な記録は発見されていない。

記録から確認され得る最初のアルト・カルト国王は、ケレチック・グレチック (Ceretic Guletic) (在位不詳；5世紀中頃) であると思われる。5世紀の中頃にキリスト教徒をピクトおよびスコットの奴隷として売っていたアルト・カルトの戦士 (Soldier) を破門した手紙を聖パトリック (Saint Patrick) (387年生? - 461年没?) は残している。その戦士がアルト・カルト王国の王ケレチック・グレチック (Cerretic Guletic) であると考えられる。聖パトリックの手紙で諫められ除名されたコロチカス (Coroticus) がケレチック・グレチックであったと推定するならば、彼およびその支配層は、キリスト教徒であったと推測できる。また、彼は、『Harleigan genealogies』でもアルト・カルト王 (支配者) と報告されている。キリスト教徒であったアルト・カルト王国のケレチック・グレチック王は、何処の国のキリスト教徒住民を人質 (奴隷) にしたのであろうか。それは、アイルランド人が居住していた現在のスコットランドのギャラウェイ地方に居住していた住民ではないであろうかと思われる。確定した資料は発見されていない。

第2代目の王は、キヌイト (Cinuit) (在位期間不明；5世紀) である。『Harleigan genealogies』では、彼をケレチック・グレチックの息子としている。彼は、Hen Ogledd (Old North) の王であった。第3代目の国王は、ドゥムナギウアル1世 (Dumnagual I) あるいはドゥムナギウアル・ヘン (Dumnagual Hen) (在位期間不明；6世紀初めに活動?) であった。彼は、『Harleian genealogies』では、キヌイトの息子で、ケレチック・グレチックの孫¹⁹ であった。また、彼には3人の息子があつた。3人はそれぞれ王家を形成した。ドゥムナギウアル1世の王位を継承した息子がクリノッホ (Clinoch), 後のアルト・カルト王のネイオンの父親であったギブノ (Guipno あるいは Gwyddeno), そしてエディンバラ王のキンフェリン (Cynfelyn) であった。ウェールズの詩では、アイダーン・マック・ガブラーンの母がドゥムナギウアル・ヘンの娘であると詠まれている。しかし、その詩ではアイダーンの息子としてガブラーン・マック・ドマンガイルト (史実では、カブラーンがアイダーンの父親である) が位置づけられており、王位の系図が錯綜している。このことから、その詩の真実性は薄いと判断される。

第4代目の王がクリノッホ (Clinoch) (在位期間不明；6世紀中頃) であった。彼は、『Harleian

¹⁸ プトレマイオスの地図では、この地域は "Damnonii" と記されている。これから Dumbarton が派生されたと思われる。

¹⁹ 後の系図『Bonedd Gwyr y Gogledd』では、ドゥムナギウアル1世は Indyued の息子で、Maxen Wledig (Magnus Maximus) の孫であった。また、彼は後のアルト・カルト王 Rhydderch Hael の曾祖父である。この系図は、ギブノ (Guipno あるいは Gwyddeno) を彼の息子ではなく曾孫にするなど、混同し錯綜している。

genealogies』によると、ドゥムナギゥアル・ヘンの息子で、トゥタグゥアル (Tutagual) の父であった。

第5代目の王は、トゥタグゥアル (Tutagual) (在位期間不明；6世紀中頃) で、『Harleian genealogies』によると、クリノッホ (Clinoch) の息子であった。聖アドムナンの『聖コルンバの生涯』では、彼は、Tothail と呼ばれ、9世紀の詩『Miracla Nyniae Episcopi』では、Tuduael および Thuuahel と呼ばれ、暴君と詠われた。また、これらでは、彼は、聖ニニアンと同時代人となっている²⁰。

第6代目の王は、リデルホ・ハエル (Riderch Hael あるいは Rhydderch Hael)²¹ (在位期間不明；580年頃から活動、614年没²²) であった。『Harleian genealogies』によると、彼の父は、ドゥムナギゥアル・ヘンである。彼は、ダル・リアダ王国や北ウェールズのグイネッツ王国 (Kingdom of Gwynedd) やベルニシア王国 (Kingdom of Bernicia) と戦闘状態にあった。彼の時代にダル・リアダ王国のアイダーン・マック・ガブラーン (Áedán mac Gabráin) (在位 574年? - 609年) がアルト・カルト宮殿を襲い、掠奪した。これは、‘3つの遠慮なき掠奪’の1つとして Welsh Triads に詠われた。

580年頃に、彼は、ゴドウィン王国²³のクリズノ・エディン王 (king of Clyddno Eiddin), エルメト王国のグワログ王 (king of Gwallog)²⁴ およびビルネイフ (Bryneich)²⁵ 王国のモルガン王 (king of Morcant)²⁶ のブリトン王と共に、グウィネッツ王国 (Kingdom of Gwynedd)²⁷

²⁰ この見解は、12世紀の Ailred of Rievaulx の『Vita Sancti Niniani (聖ニニアンの生涯)』による。しかし、伝統的には、聖ニニアンは、4世紀から5世紀に南ピクト人にキリスト教を伝道した伝道師であると考えられる。この伝統的な見解が正しければ、6世紀に活動したトゥタグゥアル (Tutagual) が聖ニニアンの同時代人とはならないであろう。

²¹ 彼は、Hen Ogledd (Old North) (スコットランド南部とイングランド北部のブリトン語を話していた地域) で最も有名な王の一人である。

²² 彼の死亡年は、『Life of Kentigern』では聖ヴァンゴ (Saint Mungo) と同じであるとされ、『Welsh Annals』では 612 年である。歴史家はこれを西暦 614 年と調整した。

²³ 現在のロージアン地域である。

²⁴ 中世の Black Book of Chirk では、彼はアーサー王の騎士の1人として詠まれ、Welsh Triads ではブリテン島における3人の怪力軍人の1人である。

²⁵ 現在のノーザンバーランド地域である。

²⁶ 彼は、ブリトン王ウリーンを Llofan Llaif Difo という人物に暗殺させた。これによってブリトン連合は崩壊した。

²⁷ このグウィネッツ (Gwynedd) 王国は、5世紀から13世紀後半まで存続したウェールズの小さな王国である。ローマ人がブリタニアを去った410年以降、ローマ時代に Venedotia と知られていた地域に、ローマ人の侵攻以前からそこに住んでいた少数民族 (Ordovices や Gangani や Deceangli) が復興した。この王国は少数民族を基盤として構成されていたと考えられる。

ニニウス (Nennius) (809年没) は、その王国の基礎の形成者をグネダ (Gunedda) (在位不詳；5世紀) としている。彼が初代の王であった。ニニウス (Nennius) の『Historia Brittonum』によると、彼は、彼の息子とその従者と共に、マナウゴドウィン (Manaw Gododdin；現在のクラックマナンシャー

の王位を要求したストラスクライド王国の王子エリディル・ミンファウル(Elidir Mwynfawr)²⁸がグウィネッツのアフロン(Afron)で殺害されたことに対する復讐として、グウィネッツ王国のマエルギン王の息子ルン・ヒール(Rhun Hir ap Maelgwn)(在位547年-586年)とアフロン(Afron)のAber Mewydus(現在のCadnantあるいはBattle Brook)で戦った。その結果は、はっきりしていない。ルン・ヒールは北に攻め入り戦ったが、その結果は彼自身の死であった²⁹と思われる。

『Historia Brittonum』では、リデルホがベルニシア(アングル人)に敵対し戦った北ブリ

辺り)から、ピクトとの戦いに敗れて移住してきた。グウィネッツの宮廷はDeganwy城であった。彼と彼の息子は、450年頃に、アイルランドのUí LiatháinとLaiginなどの侵入者を追放した。彼の死後、その王国は、その地域の慣習によって彼の息子の中で分割された。グネダ(Cunedda)の後継者は、エイニオン・イルズ(Einion Yrth)(在位470年?-500年)であった。2代目の国王であった彼は、470年頃にアイルランド人を追い出し、そして3代目の王カドワロン・ラウヒール(Cadwallon Lawhir)(在位500年?-534年)が王国を統合し、強大な王国になる基礎を築いた。グウィネッツ王国は、カンブリア地域で卓越した地位を築いた王国であった。

彼の曾孫マエルギン・ヒール(Maelgwn Hir)(547年没)が4代目の国王であった。彼は、Deganwy城に彼の要塞を築き、キリスト教のウェールズでの普及に貢献した王であった。しかし、Gildaの『De Excidio et Conquestu Britanniae』では、歴史上道徳的には最も不人気の5人の国王の中の1人に入れられている。次に、その5代目の国王は、マエルギンの息子ルン・ヒール(Rhun Hir ap Maelgwyn)(在位547年?-586年?)、その6代目の国王は、彼の息子ベリ(Beli ap Rhun)(在位586年?-599年?)であった。その7代目の国王は、ベリの息子のイアゴ(Iago ap Beli)(在位599年?-616年)であった。彼の治世下において、グウィネッツ王国とポウイス王国(Kingdom of Powys)の両王国は、侵攻するアングル人のベルニシア王国とデイラ王国の進軍を食い止めるために共同行動をとった。613年のチェスターの戦い(Battle of Chester)では、両国は共同してアングル・サクソン王国と戦ったが、ブリトン側の惨敗であった。この敗戦によって、ブリトン側は、ウェールズとOld North(カンブリアとストラスクライド)との連絡が分断された。ベルニシア王国(ノーザンブリア王国)のウェールズ侵攻と政略がより可能になったと思われる。その第8代目の国王は、イアゴの息子カドファン(Cadfan ap Iago)(在位616年?-625年?)で、この王についてもよく知られていない。彼は、聖ベウノ(Saint Beuno)(640年没)のパトロンであった。ベウノは、Clynnogにある修道院の大修道院長であり、616年にClynnogに修道院を建てた。カドファン王は、彼に広大な土地を約束した。この約束は、次の王カドワロンCadwallonによって実行され、彼に60頭の牛に相当する金の笏を謝礼として与えるものであった。その第9代目の王は、カドファンの息子カドワロン(Cadwallon ap Cadfan)(在位625年?-634年)であった。彼は、ノーザンブリア王エドウィンの野心に翻弄された国王であった。エドウィンは、エルメト王国を吸収し、アイルランド海に道を開き、彼の支配をマン島やアングルシー(Anglesey)島に拡張すると、カドワロン王は、彼に服従するかあるいはそこから逃亡するかのいずれかの選択肢しかなかった。彼は、629年頃に、アイルランドに逃亡した。その後、グウィネッツに戻り、マーシャ王国のペンダ王(King Penda)などと協働でエドウィンを倒した(633年のハトフィールド・チェーズでの戦い(Battle of Hatfield Chase))。その後もウェールズはアングルと敵対した。

²⁸『Triads of Horses』によると、エリディル・ミーンファウルは、ルン(Rhun)の妹(あるいは姉)Eurgainの良人であったので、彼はグウィネッツ(Gwynedd)王国の王マエルギン(Maelgwn)の義理の息子であった。そのことによって彼は、グウィネッツ王国の王位を要求できた。

²⁹『Taliesin』物語のMarwnad Rhunの挽歌によると、ルン・ヒル(Rhun Hir ap Maelgwn)はその戦いで死んだ。

トンの王の1人として記録されている。また、同資料で、彼は、レゲド(Rheged)³⁰王国の王ウリーン(Urien)³¹(在位550年?-590年)やMorcant王等と共にベルニシア王国のイダ王の息子の1人であったセオドリック(Theodric)(在位572年-579年)の親子と戦い、リンディスファーンに彼らを3日間包囲した。この戦いはブリトン連合軍の敗北であった。また、このころ、ウリーン王やオーエン王子の親子と、ノーザンブリア王国のイダ王の息子(多分、セオドリック王)との戦い(アルクルド要塞の戦い)がおこり、セオドリック王は殺害された。

また、600年頃に、ゴドウィン人とアングル人との間でカトリース(Catraeth)(北ヨークシャーのCatterick)において戦い(カトリースの戦い)が繰り広げられた。このアングル人とは、ノーザンブリア人(ベルニシア王国)であったと思われる。ゴドウィン王(Mynyddog Mwynfawr³²)は、ストラスクライド王国やエルメト(Elmet)王国やグウィネズ(Gwynedd)王国やキノン・エディン(Cynon Edidin)(在位期間不明)のエディンバラ等のブリトンの王国から、ディン・エイディン(Din Eidyn:現在のEdinburgh)に300人の勇士を集め、精鋭部隊を形成し、カトリースにあったベルニシアの要塞を襲撃し、ベルニシアの北上進行を食い止めようとした。この戦いについては、その戦いで戦死したブリトンの英雄的な戦闘を讃

³⁰ この王国は、中世初期において、北西イングランドの現在のカンブリア、および、多分、ランカシャー州およびスコットランドに広がっていた王国であろうと推測される。この王国が、Llvennetの支配者と言及されるときには、この王国はウェストモアランド州に位置したと理解されている。この王国は、吟遊詩人によって詠われた王国でもあった。この王国は、レゲド王ウリーンとその家系に結びつけられる。この王国は、ベルニシア王国がデイル王国を合体した後のノーザンブリア王国に吸収された。その吸収方法は宮廷結婚によるものであった。638年に、ノーザンブリア王国のオズウィ王子(後のオズウィ王)とレゲドの王女リムメルス(Riemmelth)とが結婚した。レゲド王国は、平和裏に、ノーザンブリア王国に掠奪された。すなわち、両国は、同じ王によって、継承された。一種の「同君連合」であったのではないかと思われる。

³¹ ウリーン王は、6世紀後半のレゲド王国の王であり、詩人タリエシン(Taliesin)(6世紀の詩人)によって彼のグウェン・イストラ(Gwen Ystrad)およびアルト・カルト(Alt Clut)での活躍において賛美された王であった。彼の父は、キンファーフ・オエル(Cynfarch Oer)(6世紀に活動)であり、573年のアルフズリズの戦いに参戦した。彼の父の祖先は、ローマの退却した後のハドリアンウォール地域の軍事指導者であったCoel Hen(King Cole)の末裔であった。彼は、アルト・カルト(ストラスクライド)王のリデフ・ヒール(Rhyddech hael)および他のブリトン王(Gwallog mab Llaenog, Morgant Bwlch)と連携して、ベルニシア王国の王イダに対して戦った。しかし、『Historia Brittonum』によると、彼は、モルガン・ブウルフ(Morgant Bwlch)の嫉妬心によって暗殺された。

彼は、伝説上の人物であったアーサーの妹Morgan le Fayと結婚し、アーサーの王位継承には反対し、反乱を起こしたが、しかし、戦いに敗れた。その後は、彼は、アーサーの連隊の家臣になった。アーサーとウリーンは、モルガンと彼女の愛人アコロン(Accolon)に殺害される。アコロン達はその王位を継承した。

³² この王が実在した人物かどうかははっきりしない。Y Gododdinnに登場する人物名の王の名前である。この人物に該当する歴史上の人物は見付かっている。もし実在した王であるならば、彼は、エディンバラに宮廷を持つ王であったのであろう。また、他の説では、Mynyddog Mwynfawrを地名の擬人化であり、エディンバラあるいはゴドウィンを意味すると解釈している。

える挽歌である“Y Gododdin”の詩に詠われている。この戦いに、リデルホ・ハエル(Riderch Hael あるいは Rhydderch Hael) やレゲド(Rheged) 王国の王ウリーン(Urien) (在位 550 年? -590 年) が参戦したかどうかは不明である。ブリトン人の連合体は、この戦いでアングル人に大敗した。このときのアングリ人(ノーザンブリア王国)の王がアシルフリス(Æthelfrith)) (在位 593 年-616 年)であったと推測される。その後、ゴドウィン王国の都であったディン・エイディンが 638 年に落ち、7 世紀半ばには、ベルニシア王国にゴドウィン王国は滅ぼされた(あるいは吸収された)と思われる。その地域は、その後には、ベルニシア王国³³ に治められるようになったことから推測される。

宗教面では、リデルホ王は、ローマ・カトリックの聖ヴァンゴあるいはケンティゲルン(Saint Mungo あるいは Kentigern) (614 年没)の保護者であった。また、リデルホ王は、彼にグラスゴーの土地を与え、ストラスカイドに司教区を確立させた。聖ヴァンゴはグラスゴーで最初の司祭になった。リデルホ王は、聖ヴァンゴならびに聖コルンバと同時代人であった。聖コルンバ(521 年生-597 年没)は、ダル・リアダ王国のアイダーン王を支え、リデルホ王とは敵対する王国の守護聖人であった。

第 7 代目の王は、ネスオン(Neithon) (在位期間不明; 620 年没?) であった。『Harleian genealogies』によると、彼は、ドゥムナギアル・ヘンの息子ギプノ(Guipno) の息子で、ドゥムナギアル・ヘンの孫であった。この人物が、『Annals of Ulster』のネフタンや『Senchus fer n-Alba』のネフタンと同一人物かどうかが問題になる。この問題から考察しよう。『Annals of Ulster』では Nechtan son of Canu が 621 年に死んだと報告されている。『Senchus fer n-Alba』ではアイダーン・マック・ガブラーンの息子ガルナイト(Gartnait) が子カヌー(Cano あるいは Canu) をもうけたと報告されている。もしこの『Annals of Ulster』に記されたカヌーの息子ネフタンがアイダーン・マック・ガブラーンの息子ガルナイト(Gartnait) の息子カヌー(Cano あるいは Canu) の子 Nechtan であれば、Nechtans son of Canu はガルナイトの孫であり、ダル・リアダ王ガブラーンの曾孫になる。さらに、もしカヌーの息子ネフタンがドゥムナギアル・ヘンの息子ギプノ(Guipno) の息子のネスオンと同一人物であれば、アルト・カルト王国とダル・リアダ王国は何らかの血縁関係にあったと推測される。もしかしてアルト・カルト王国がダル・リアダ王国の支配下にあった、あるいは、ダル・リアダ王国に従属していたのかも知れない。しかし、アイダーン・マック・ガブラーンの息子ガルナイト(Gartnait) の息子カヌー(Cano あるいは Canu) の子 Nechtan がアルト・カルト王国のドゥムナギアル・ヘンの息子ギプノ(Guipno) の息子ネスオン王(Neithon) かどうか

³³ その主な中心地は、バンバラ(Bamburgh), ダンバー(Dunbar), ゴールディング(Goldingham) であった。

は不明である。ネスオンの父親が Guipno であり, Canu であるという矛盾した結果になる。

また, ネスオンに関するもう一つの資料『Pictish Chronicle』では, ピクト王国を 20 から 21 年の間治めたピクト王ウエルブの甥ネフタン (Nechtan nepos Uerb)³⁴ (在位 597 年-617 年)が報告され, 彼の前王がガルナイト (Gartnait) であると報告されている。これから, ドゥムナギッアル・ヘンの息子ギブノ (Guipno) の息子ネスオン王 (Neithon) とピクト王ネフタン・ネボシ・ウエルブ (Nechtan nepos Uerb) とは同一人物で, アルト・カルト王国とピクト王国は親戚関係にあったと推測される。もし同一人物であるならば, ピクト王国はダル・リアダ王国の支配下にあった, あるいは, アルト・カルト王国に従属していたと推測できる³⁵。さらに, もしネスオンがベリ (Beli I) の父であるならば, アルト・カルト王国のネスオンとピクト王国のウエルブの甥のネフタン (Nechtan nepos Uerb) とが同一人物である可能性が高くなる。アルト・カルト王国とピクト王国の関係がより深くなっていたと思われる。しかし, 両者が同一人物であったという確証はない。

第8代目の王は, ベリー1世 (Beli map Neithon; Beli I) (在位7世紀初めから中頃) であった。彼は, 『Harleian genealogies』によると, ネスオン (Neithon) の息子で, 彼の後継者エウゲン1世 (Eugein I) の父親である。聖アダムナンの『聖コロンバンの生涯』によると, 彼は, ピクト王ブリイデイ3世 (Bridei III) (在位671年-693年) の父親でもあった。『Historia Brittonum』は, ブリイデイ3世はノーザンブリア王国のエクフリス (Ecgrifith) (在位670年-685年) と従兄弟である³⁶ と記している。『Annals of Cambriae』は, Beli map Neithon の死を627年にしている。この Beli は, ネスオン (Neithon) の息子 Beli of Alt Clut であろう。

さらに, ベリー1世の父ネスオンが, 多分, ピクト王国のネフタン・ネボシ・ウエルブ (Nechtan nepos Uerb)³⁷ と同一人物とみなしてもかまわないであろう。

第9代目の王は, ベリーの息子のエウゲン1世 (Eugein; Eugein I) (在位不詳; 7世紀中頃) で, 658年までには死んでいたと思われる。彼はエルフィン (Elfin) (在位不詳; 7世紀後半) の父親であると思われる。『Harleian genealogies』では, エウゲン1世がベリーの王位を継承したとある。ピクト王ブリイデイ3世 (Bridei III) (在位671年-693年) がベリーの息子であっ

³⁴ 彼はピクト王国の王であった。

³⁵ というのは, Uerb は女性の名であろう。ピクト王国にとって, Uerb と Nechtan の関係が重要であって, 彼の父親との関係は重要でなかった。彼が Canu の息子であるか, あるいは, Guipno の息子であるかはピクト王国にとって関心事ではなかった。

³⁶ ベリーの妻がノーザンブリア王国の貴族 (デイラ王国エドウィンの娘) であったのかも知れない。

³⁷ 『Pictish Chronicle』では, 彼が Abernethy に修道院を建設したと記録している。その人物がネフタン・ネボシ・ウエルブ (Nechtan nepos Uerb) なのか, それともネフタン・マック・デル・イレ・ (Nechtan mac Del-Ilei) (在位686年-732年) なのかは確定していない。

たと推察されるので、彼は、ブリイデイⅢの兄弟あるいは異母兄弟であったのかも知れない。彼は、642年のストラスカロンの戦い（Battle of Strathcarron）³⁸でダリ・リアダ王ドムナル・ブレック（Domnall Brecc）（在位 629 年？-642 年）を殺害し、ダリ・リアダ王国の勢いを削いだ。その大敗によってダル・リアダ王国の勢力は衰えたと推察される。彼は、確かに、658 年までには死んでいたが、いつ死んだかは分からない。

以上の 9 代目までのアルト・カルトの国王は、その在位期間が確定しない王であり、伝説上の、あるいは、半歴史上の人物であると言われている。特に、王の系図から、ブリテン人のアルト・カルト王国とダル・リアダ王国の関係、同時に、そのピクト王国との関係がぼんやりと見えてくる。ダリ・リアダ王国のアイダーン王の西方への侵略と同時に、そのことを反映してアルト・カルト王国の王の系図にダル・リアダの血が流れて来たと見ることができ

1.2.3 歴史上のアルト・カルト王国の発展

第 10 代目の王は、『Annals of Ulster』の死亡記事によると、グレット（Guret）（在位不詳；658 年没）であると読み取れる。彼は、エウゲン（Eugein）から王位を継承し、エウゲンの息子あるいは兄弟であったと推測される。しかし、『Harleian genealogies』には彼の名前はなく、他の王の名前が挙げられている。第 11 代目の王は、『Harleian genealogies』によると、エルフィン（Elfin）（在位不詳；693 年没）で、エウゲンの息子で、かつ、ベリ 2 世（Beli II）の父であった。『Annals of Ulster』には、693 年に死亡した“Alplin m. Nectin”の名前が挙げられている。このネクチン（Nectin）がアルト・カルト王国のネスオン（Neithon）であったかもしれない。ここでは、そうであると解釈し、ネスオンの息子エルフィン（Alplin）の没年を Elfin の没年（693 年）とした。その資料では、エルフィン（Elfin）は、ネスオン（Neithon）の息子になっている。しかし、『Harleian genealogies』では、ネスオン（Neithon）は、エルフィン（Elfin）の祖父であり、620 年ごろに死亡している。2 つの資料が首尾一貫しない。多分、『Annals of Ulster』が、誤って、父エウゲン（Eugein）の代わりに祖父のネスオン（Neithon）を入れたのであろう³⁹。

また、アルト・カルト王国は、7 世紀後半から 8 世紀にかけては、ダル・リアダ王国との

³⁸ ここがハイランドのストラス・キャロンか、あるいは、フォースのキャロン川かどうかは、確定しない。

『Annals of Ulster』には、この場所を‘Srath Caruin’としている。ウェールズの *Y Gododdin* には‘the Battle of Strathcarron’とある。

³⁹ また、『Annals of Ulster』によると、673 年に Conamail と共に捕らわれた Eliuin m. Cuirp が記録されている。この Eliuin m. Cuirp が Elfin であると言う説もある。これでは、Elfin を Nechtan nepos Uerb の曾祖父とする。

間で戦闘状態にあった。『Annals of Tigernach』によると、678年にブリトン人がダル・リアダ王国のフェルフアル・フォタ王 (Ferchar Fota) を Tiriú において敗北させた⁴⁰。このブリトン人の王の候補としてアルト・カルト国王が挙げられ、その王としては、エルフィン (Elfin) (在位不詳; 693 年没) が該当すると思われる。さらに、また、ベルニシア王国 (ノーザンブリア王国) との間でも戦闘状態にあったと考えられるが、具体的な記録を見つけることはできない。

第12代目の国王は、ドゥムナグゥアル2世 (Dumnagual II) (694 年没) である。彼は、『Annals of Ulster』によると、エウゲン (Eugein) 王の息子であった⁴¹。第13代目の国王は、ベリ2世 (Beli II) (在位不詳; 722 年没) で、『Annals of Ulster』によると、722年に死亡している。彼は、『Harleian genealogies』によると、エルフィン王の息子で、チュエズブル王の父親である。8世紀初めには、ダル・リアダ王国との間で、711年には Lorg Ecclet において、および、717年には Minuirc において戦いがあった。この戦いが、ダル・リアダ王国の国勢にどのように影響したかを知ることは困難である。またその2つの戦いがアルト・カルト王国にどのような影響を与えたかは不明である。

1.2.4 アルト・カルト王国とピクト王国

アルト・カルト王国は、8世紀中頃ごろまではその勢力を保ったが、しかし、8世紀後半には、周辺国のピクト人との戦いがアイルランドの年代記などに記録されていることから推測されるが、その勢力が削がれることとなった。ピクト国の王オエンガス1世 (オエンガス・マック・ファークッソ) (Óengus mac Fergasso) (在位 732 年-761 年) とアルト・カルト王は、744 年、750 年、756 年に戦ったと記録されている。

第14代目の王が、『Harleian genealogies』によると、チュエズブル王 (King Tuedebur)⁴² (在位 722 年?-752 年)⁴³ である。750年にアルト・カルト王国が、『Annals of Cambriae』によると、ヴァンドック (Mugdock) において、ピクト王オエンガス1世 (Óengus I) (在位 732 年-761 年) の兄弟タロルガン (Talorgen) とノーザンブリアの連合軍に勝利した。このときのブリテン王がチュエズブル王であり、ノーザンブリア王国の王はエズバート (Eadberht) (在位 737 あるいは 738 年-758 年) であったと考えられる。アルト・カルト王国のキール (Kyle)

⁴⁰ 『Annals of Tigernach』の678年に記録されている。Tíriú が、現在の何処なのかは不明である。

⁴¹ そこには、"Domnall, son of Aun, king of Alt Cult, dies" とある。ここで Aun は、Eugein で、アルト・カルトの Eugein I のことである。

⁴² 彼は、Beli (在位不詳、722 年没) の息子であり、アルト・カルトの王ドゥムナグゥアル3世の父である。

⁴³ 『Annals of Tigernach』には、752年に "Taudar mac Bile, ri Alo Cluaide" とあるので、アルト・カルト王のチュエズブルは752年に死亡したのであろう。

がエズバートに奪われた。第15代目の王が、ロトリ (Rotri) (在位 752 年-754 年?) であった。彼は、ウェールズの王の系図およびアイルランドの年代記には記録されていない。『Annals of Cambriae』は、彼が 754 年に死亡したと記録されている。

第16代目の王は、ドゥムナグゥアル 3 世 (Dumnagual III)⁴⁴ (在位? 754 年-760 年)⁴⁵ であった。756 年に彼はピクトとノーザンブリアとの連合王国軍に降服した。『Symeon of Durham』によると、ピクト王国の王オエンガス 1 世がノーザンブリアの王エズバートと“連合し”，アルト・カルトを包囲し、攻撃した (756 年 8 月 1 日)。ストラスカイド王国は両国に臣従礼をした。

これ以降、9 世紀半ば過ぎのヴァイキングの侵攻⁴⁶ を受けるまでのおよそ 100 年間、アルト・カルト王国は、ピクト王国あるいはピクトとノーザンブリア両王国の支配下にあったと推察される。

第17代目の王が、エウゲン 2 世 (Eugein II) (在位不詳; 8 世紀後半) であったと思われる。彼については『Harleian genealogies』にのみから知られ、他の資料から彼の名を確認することはできなく、彼の正確な在位期間は不明である。また、彼の活動を知らせる直接的な資料も見つかっていない。その王家の系譜に関する資料によると、彼はドゥムナグゥアル 3 世 (Dumnagual III) の息子であった。このように、彼のことは王家の系譜『Harleian genealogies』のみで伝えられ、他の資料にはない。このことは、アルト・カルト王国が、1 世紀以上の間、ピクト王国の属領であったことを示していると理解できる。『Annals of Ulster』には、780 年に“アルト・カルトが燃える”と記録されている。このときの王は、エウゲン 2 世 (Eugein II) であったと推察できる。第18代目の王はリデルホ (Riderch) (在位不詳; 9 世紀初め) であった。彼の在位期間も不明である。彼は、『Harleian genealogies』によると、エウゲン 2 世の息子で、かつ、ドゥムナグゥアル 4 世 (Dumnagual IV) の父親である。彼の父親と同様に、彼のことは、『Harleian genealogies』のみで伝えられ、他の資料にはない。また、彼の活躍を知らせる直接的な資料も見つかっていない。このことも、アルト・カルト王国が 1 世紀以上の間にわたってピクト王国の属領であったことを裏付けるいると考えられる。第19代目の王がドゥムナグゥアル 4 世 (Dumnagual IV) (在位不詳) であったと思われる。彼が王であったことは『Harleian genealogies』のみで伝えられ、他の資料にはない。また、彼がアルト・カルト王国の王であったことを直接的に証す資料はない。849 年にブリトン人によ

⁴⁴ 『Symeon of Durham』によると、アルト・カルト王国がピクト王オーエンガス・マック・ファーガシッソおよびノーザンブリア王エオジベルハト (Eadberht) によって侵攻されたとある。そして、ブリトンのストラスカイドは降服した。このときのアルト・カルト王はドゥムナグゥアル 3 世であった。

⁴⁵ 『Annals of Cambriae』によると、ドゥムナグゥアル 3 世の死を 760 年においている。

⁴⁶ ヴァイキングの侵攻は 870 年頃であった。

てダンブレーン (Dunblane) が燃やされたことが『Chronicle of the King of Alba』に記録されている。

1.2.5 ヴァイキングの侵攻とアルト・カルト王国の消滅

その第20代目の王は、アルトガル・マック・ドゥムナグゥアル (Artgal mac Dumnagual) (在位不詳; 872年没) であった。『Harleian genealogies』によると、彼は、ドゥムナグゥアル4世 (在位不詳, 9世紀中頃) の息子であった。彼の治世の下において、ヴァイキング⁴⁷がアルト・カルト王国にも侵攻したと思われる。アルト・カルト王国は、870年に、北欧人 (ノルウェイ人) でダブリン王国 (アイルランドのダブリンに立てられたヴァイキングの王国) の指導者 (王) のアヴラブ・コング (Amlaíb Conung)⁴⁸ (875年没) とイヴァール (Ímar,あるいはÍvarr) (873年没) に包囲され、掠奪された。さらに、彼は、捕虜としてヴァイキングによってダブリンに連行され、872年にピクト王コンスタンティン1世 (コンスタンティン・マック・キナエダ) (Causantín mac Cináeda; Constantín I) (在位 862年-877年) の扇動あるいは同意によってそこで殺害された⁴⁹。ストラスクライド王国の滅亡・消滅にもヴァイキングの侵略・略奪が関係していた。

『Annals of Ulster』ではアルトガル・マック・ドゥムナグゥアルの資格としてストラスクライド王を用いている。すなわち、"rex Britanorum, Strata Claude (ストラスクライドのブリテン王)" と記録されている。彼は、ストラスクライド王と呼ばれた最初の王であった。

⁴⁷ フランク帝国で活動していたヴァイキングの軍の一部 (the Great Heathen Army) が865年に東アングリアに上陸した。東アングリアのエドマンド王から貢ぎ物を受け取り、そこから北上し、866年にはヨークを中心とするノーザンブリアに向かった。ノーザンブリアのヨークを襲撃し、867年にオズバート (Osberht) (在位 848あるいは849年-862年) とアラ (Ælla) (在位 865年?-867年) のノーザンブリア王と戦い、ヴァイキングは彼らを殺害した。東アングリア王国、マーシャ王国、ノーザンブリア王国がヴァイキングの攻撃を受けているとき、他のヴァイキング軍がより北方で活動していた。それがアヴラブ・コング (Amlaíb Conung)⁴⁷ (875年没) とイヴァール (Ímar,あるいはÍvarr) (873年没) の軍であった。

⁴⁸ 彼の父親は、ノルウェイの王ゴッフレズ (Gofraid of Lochlann) (849年生?-873年没?) であった。彼は、853年にノルウェイ (あるいはオークニ諸島) からアイルランドに入り、アイルランドの各王 (マンスターやレンスターなどの地域王ならびに上王) と戦い、ダブリンを拠点に活動した。アヴラブ・コング (Amlaíb Conung)⁴⁸ (875年没) とイヴァール (Ímar,あるいはÍvarr) (873年没) は、864年あるいは866年にピクト王国を侵攻し、その国を略奪し、人質を奪った。870年にストラスクライドのダンバートン (クライド川とレヴァン川の出合う地域) を襲撃し、871年にはダブリンに略奪品と人質を伴って戻った。『Annals of Ulster』には、872年にブリテン王 (多分、アルトガル王) がコンスタンティンの同意の下で殺害されたと記録されている。彼は、871年あるいは872年にコンスタンティン1世によって殺害されたと推察される。

⁴⁹ 彼が殺害されたことは『Annals of Ulster』に記録されている。コンスタンティン1世の同意のもとで、アルト・カルト (ストラスクライド) 王が殺害されたことは、多分、このときにはアルト・カルト王国はピクト王国の支配下にあったことを意味していると考えられる。コンスタンティン1世とドゥムナグゥアルの息子アルトガル王は、義理の兄弟であった。

国名が変更されていること、また政治の中心がダンバートンからゴーヴァンに移されていることから、ストラスクライド王国は、ピクト王国の属国になったと考えることもできる。彼の後継者はルン（Run）であった。

その第21代目の王はルン（Run）（在位872年-878年）であり、彼の妻はピクト王のケネス1世あるいはケネス・マクアルピン（Kenneth IあるいはKenneth MacAlpin）（在位843年?-858年）の娘⁵⁰であった。よって、ルンはピクト王コンスタンティン1世⁵¹とは義理の兄弟であった。ルンがピクト王国の王女と結婚していることから、ルン王のアルト・カルト王国（ストラスクライド王国）がコンスタンティン1世のピクト王国の強い影響を受けていたと思われる。もしかしてルン王はコンスタンティン1世に臣従していたのかも知れない。あるいは支配の下にあったとも理解される⁵²。よって、ルンがどれ程独力でストラスクライド王国を支配する権限をもっていたかどうかは不確定である。多分、このときには、コンスタンティン1世がストラスクライド王国の大君主権（overlordship）を握っていたと推察できる。

第22代目の王は、エオハズ・マック・ルン（Eochaid mac Run）（ピクト王としての在位878年-889年?）であった。彼が、アルト・カルト王国の王であったのか、それともピクト王国の王であったのか、あるいは、それとも両国の国王（「同君連合」の国王）であったのかかもしれない。もしエオハズ王が物的な意味での同君王であったならば、アルト・カルト王国は、ピクト王国の属領であったと考えられる。『Chronicle of the King of Alba』には、彼は、21代国王Runの息子であり、彼の母はケネス・マクアルピンの娘で、11年間ピクト王国を治めたと記録されている。しかし、『Duan Albanach』では、エオハズ（Eochaid）がピクト王であったと記録されては無く、ピクト王国の王は、アエダ・マック・キナイダ（Áed mac Cináeda）（在位877年-878年）からドナルド2世（Donad IIあるいはDomnall mac Causantín）（在位899年-900年）に跳んでいる。ピクト王国の王位を空位にし、飛ばしている。それを空位にしている理由は分からない。

また、ギリック（Giric）⁵³（ピクト王としての在位878年-889年）がエオハズの養父あるいは後見人であったので、ギリック（Giric）とエオハズがピクト王国を共同統治⁵⁴したと『Chronicle

⁵⁰ コンスタンティン1世の娘であったという説もある。ここではケネス1世の娘とした。

⁵¹ コンスタンティヌス1世は、ピクト王ケネス1世の息子であり、877年にファイフ海岸でヴァイキングによって斬首されたと思われる。

⁵² 聖コンスタンティン教会は、ルンの時代に、ゴーヴァンに建てられたと思われる。これは、ルンがコンスタンティン1世に従属していたことを意味すると取れるのかも知れない。

⁵³ 彼の父は、多分、ケネス・マクアルピンの兄弟のDomnall mac Ailpín（在位858年-862年）の息子である。彼の前の国王は、ケネス・マクアルピンの兄弟のアーエド・マック・キノーエド（Áed mac Cináed）（在位877年-878年）であった。

⁵⁴ しかし、実際に共同統治したかどうかは不明である。

of the King of Alba』に記録されている。エオハズやギリックの統治期間は、ケネス・マクアルピンの子孫が存在しない時期と重なり合う。アイルランド資料やアングロ・サクソン資料には、ギリックの統治については記録されていない。

ヴァイキングの侵攻によってアルト・カルト周辺の王国の勢力が削がれた時期に、アルト・カルト王国は一時的にその息を吹き返した⁵⁵が、やがてその勢力は一層衰えた。実際、エオハズ・マック・ルン (Eochaid mac Run) もギリック (Giric) もアルト・カルト王国の王ではなく、ピクト王国の王であったのかもしれない。

エオハズ・マック・ルンの後継者は誰なのかよく分からない。また、ヴァイキングにアルト・カルト王国の中心地であったダンバートンが破壊された後、10世紀には、アルト・カルト王国はアルバ王国の支配下に入ったのか、あるいは、カンブリア王国にアルト・カルトの王家が亡命したのかどうかは確定できないが、多分、その王家がカンブリア王国に亡命したか、あるいは、カンブリア王国がストラスクライドの全て (その一部) を占領したと考えられる。ヴァイキングの侵攻後は、アルト・カルト王国という名前ではなく、ストラスクライド (Strathclyde) 王国という名前が使用され、王国の中心をダンバートンからゴヴァン (Govan) に移した。この王国は、ピクト王国の強い影響下にあったストラスクライド王国あるいはカンブリア人の国になったと考えられる。

第2節 ストラスクライド王国とその消滅：アルバ王国による併合

アルト・カルト王国の中心がダンバートンからゴヴァンに移された後のストラスクライド王国の初代王は、『Chronicle of the Kings of Alba』のみから知られるが、ディフンヴァール1世あるいはドムナル1世 (Dyfnwal I, Domnall I あるいは Donald I)⁵⁶ (在位不詳; 908年から916年の間に没)⁵⁷であった。彼は、ピクト王国の王でもあったエオハイズ・マック・ルン (Eochaid mac Run) の後継者で、エオハイズ (Eochaid) の親戚であったのかもしれない。しかし、このことを知らせる資料は見つかっていない。『Chronicle of the King of Alba』では、彼は、アルバ王国の王コンスタンティン2世 (Constantin II あるいは Constantín mac Áeda) (在位900年-943年) の治世下で死んだと報告されている。彼の治世については彼の死亡以外には分かっていない。ストラスクライド王国は、コンスタンティヌス2世のアルバ王国に従属していたのではないかと推測される。

第2代目の王は、ディフンヴァール2世あるいはドムナル2世 (Dyfnwal II, Domnall II,

⁵⁵ しかし、このとき、アルト・カルト王国はピクト王国あるいはアルバ王国の支配下にあったと考えられる。

⁵⁶ ゲール語では、Domnall I といい、英語では Donald I という。

⁵⁷ "Donewaldus king of the Britons died" とある。

あるいは Donald II) (在位 916 年-934 年)であった。彼は、アイダの息子ドムナル(Domnall mac Áeda)⁵⁸とも呼ばれた。『Chronicle of the King of Alba』には、彼がディフンヴァル 1 世(Dyfnwal I)の王位を継いだと記録されている。だが、彼の治世については知られていない。ストラスクライド王国は、依然として、コンスタンティヌス 2 世のアルバ王国に従属していたと推測される。第 3 代目の王は、オーガン 1 世あるいはオーエン 1 世(Eógan I あるいは Owen I) (在位不詳; 937 年没)であった。『Symeon Durham』には、"Ouuen, king of the Cumbrians(オーエン, カンプリアの王)"とある。彼は、カンブリア人の王で、Dyfnwal II の息子であった。彼がアルバ王国の王コンスタンティン 2 世の甥であったという説もあるが、しかし、これを証明する資料は見付かっていない。937 年のブルナンブルの戦い(Battle of Brunanburh)⁵⁹で彼は殺害されたと思われる。このとき、ストラスクライド王国がアルバ王国の属領であったかどうか、あるいは、独立国であったかどうかは不明である。

その第 4 代目の王は、ディフンヴァル 3 世あるいはドムナル・マック・オーゲン (Dyfnwal III, Domnall III, Donald III, あるいは Domnall mac Eógain) (在位 941 年-973 年)であった。『Annals of Ulster』では、彼は、"Domnall m. Eogain, ri Bretan (オーゲンの息子ドムナル, ブリテンの王)"と呼ばれ、975 年のローマへの巡礼の途上で死亡したと記録されている。『Anglo-Saxon Chronicle』には、945 年にイングランドの国王エドモンド 1 世(Eadmund あるいは Edmund I) (在位 939 年-946 年)が全カンブリアを占領し、それをアルバ王国の王マエル・コルムあるいはマルコム 1 世(Máel Coluim あるいは Malcolm I) (在位 943 年-954 年)に両国の陸海軍での連帯を条件として貸し与えると記録されている。この記録が正しければ、945 年にカンブリア王国はイングランドの領土で、スコット王(多分、アルバ王マルコム 1 世)に貸し与えられたと理解できる。よって、これが正しければ、カンブリア王国の最後の王は、ディフンヴァル 3 世あるいはドムナル・マック・オーゲン(すなわち Dyfnwal III)になる。しかし、他の資料⁶⁰では、973 年にストラスクライド王国の王としてマエル・コルム 1 世(Máel Coluim I)であることが記録されている。よって、ドムナル・マック・オーゲンが最後の王であると決めることはできない。その第 5 代目の王は、マエル・コルム 1 世(Máel

⁵⁸ Domnall mac Áeda は、コンスタンティン・マック・アエダ(Constantín mac Áeda あるいは Constantin II)と兄弟であったことになる。しかし、このことを証す資料は見付かっていない。

⁵⁹ ダブリン王国のゴフレズの息子のアヴラブ(Amlaíb mac Gofraid) (在位 939 年-941 年)、アルバ王国のコンスタンティン 2 世およびストラスクライド王国のオーエン王の連合軍は、ウェセック王国のアシルスタン王(Æthelstan) (在位 924 年-939 年)とエドモンド 1 世(Edmund I) (在位 939 年-946 年)を攻撃したが、敗北した。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、連合軍の 7 人の若い王と連合軍の貴族(高官, earl)およびコンスタンティン 2 世の若すぎる息子の死が記されている。その戦勝したアシルスタン王によるイングランドの統一が認められたと推測される。すなわち、937 年と 939 年の間に発布された王の勅許状には、彼は、"totius rex Brittanniae" (Ruler over all Britain)と記されている。

⁶⁰ 他の資料の 1 つが『Florence Worcester』である。

Coluim I) (在位 973 年-997 年)であった⁶¹。彼は、アルバ王国の王と共にイングランド王エドガー(Edgar) (在位 959 年-975 年)と会った 8 人の王に中の 1 人であった。このことから、ストラスクライド王国は、独立した国であったと理解することができる。その第 6 代目の王は、オーエン 2 世あるいはオーガン 2 世(Owen II あるいは Eógan II) (在位不詳; 11 世紀初めに活動)であった。『Symeon Durham』によると、彼は 1018 年のカラム(あるいはコールズストリーム)の戦い(Battle of Carham (Coldstream))⁶²に参加した。ウェールズの年代記には、彼は 1015 年(1018 年の誤りであろう)に死亡したと記録されている。しかし、この戦いで彼が死んだかどうかは明らかではない。もし 1018 年に死んでいたならば、ストラスクライド王国は彼の代で消滅したことになる。ストラスクライド王国は、11 世紀以降からスコットランド王デヴィッド 1 世(David I) (在位 1124 年-1153 年)の治世まで存続したと考えられる。彼の治世時に、ストラスクライド王国がアルバ王国の属領であったか、あるいは、独立した国であったかどうかは不明であるが、多分、アルバ王国の属領であったであろうと推測される。

第 7 代目の国王として、マエル・コルム 2 世(Máel Coluim II)が知られるが、彼の治世の詳細は全く分からない。11 世紀後半のアルバ王国のマルコム 2 世(Malcolm II あるいは Máel Coluim mac Cináeda) (在位 1005 年-1034 年)の治世下にストラスクライド王国は、アルバ王国に吸収され、その属領あるいはその一部になったと推測される。もしこのとき既にアルバ王国の属領であったならば、ストラスクライドのマエル・コルム 2 世(マルコム 2 世)はアルバ王国の高官(宮廷貴族)あるいは従属王であったのかも知れない。

第 3 節 アルト・カルトならびにストラスクライド両王国とキリスト教

4 世紀末あるいは 5 世紀初めに、ブリトン人の聖ニニアン(Saint Ninnian)⁶³ (360 年生? -

⁶¹ 『Annals of Ulster』には、"Mael Coluim m. Domnaill, ri Breton Tuasicirt, mortitur" とある。ここで Tuasicirt は、北部と訳されるが、この時、ブリトン人の国は南部にもあったと理解できる。

⁶² これは、アルバ王国のマルコム 2 世とストラスクライド王国のオーエン 2 世のバンバルグの王宮貴族(高官)エズウルフ 2 世(Eadwulf II Cudel) (在位 1016 年-1019 年)に対する戦いであり、この戦いでマルコス 2 世のほう勝利した。このときのイングランド国王は、告白王エドワード(Edward the Confessor) (在位 1042 年-1066 年)であった。

⁶³ 聖ニニアンについては、不明なことが多いのであるが、伝統的には、ペーダのイングランド教会史によると、彼は、ブリトン人で、ローマで研究した。そして、彼は、ウィットホーン半島の南端にカンディダ・カサ修道院(Monastery of Candida casa)を建て、キリスト教管区を形成した。その修道院から多くのアイルランド修道士を輩出している。その中には、アイルランドのアラン島にキレイニ修道院(Monastery of Killeany)を建てた聖エンダ(Enda of Aran) (530 年没?) やウルガータ聖書をアイルランドにもたらし、モヴィル修道院(Movilla Abbey)をウルスター州に建てた聖フィニアン(Saint Finnian of Moville) (495 年生-589 年没)がいる。

アイルランドの聖人については、『アイルランド聖人録』(Catalogus Sanctorum Hiberniae)に詳しい。

432 年没）は、スコットランド南西部（ギャロウエイ：Galloway）のウィットホーン（Whithorn）に中心を置き活動した。彼は、397 年にウィットホーン半島の南端にカンディグ・カサ修道院（Candica Casa, その意味；White House）を建設し、スコットランド東岸からシェトランド諸島（Shetland Islands）に至るピクト人の支配地域にキリスト布教の宣教を展開し、特に、南ピクト地域（クライド湾およびフォース湾の北側で、グランピア山の南側の地域）に住む人々にキリスト教を伝道し布教したと考えられる。この頃、その地域ではローマ教皇の影響下にあった聖パトリック（Saint Patrick）⁶⁴（387 年生？-461 年あるいは 490 年没？）もキリスト教の宣教活動をしていたと思われる。5 世紀の中頃にキリスト教徒をピクトおよびスコットの奴隷として売っているアルチ・ケルチの戦士（Soldier）を破門する手紙を聖パトリック（Saint Patrick）（387 年生？-461 年没？）は送っている。聖パトリックは、この戦士がスコット（ダル・リアダ人）および背教者ピクト人と連帯していると述べている。この戦士は、既に説明したアルト・カルト王のケレチック・グレチック（Cerretic Guletic）（在位期間不明；5 世紀中頃）であったと推測される。

聖パトリックの宣教活動は、ローマからの指示によるものであったと思われる。ローマ人がブリテン島から引き上げた後、キリスト教にもペラギウス（Pelagius）（354 年生-420 年あるいは 440 年没）によるローマの考え（聖アウグスティヌスの教え）と異なる教えが広がりつつあった。この異なる教えがブリテンおよびアイルランドに広まることを恐れたローマは、

この聖人録の成立は 8 世紀から 9 世紀である。そこでは、教会の歴史を 3 期に分けている。第 1 期は 544 年まで、第 2 期は 598 年まで、そして第 3 期を 664 年までと区分している。第 1 期は非独身主義の司教、第 2 期は女性の社会を避け、修道院から女性を排除する独身主義の聖職者の時期、第 3 期は荒野に住み、私有財産を捨て喜捨によって生活する禁欲主義の時期であった。

⁶⁴ 聖パトリックは、カンブリアの Glannoventa（グランノヴェンタ）（現在のラヴェングラス Ravensglass）に生まれたと考えられている。彼の父は助祭（Deacon）であり、彼の祖父は司祭（Priest）であった。パトリックは、16 歳のとき、奴隷（捕虜）としてアイルランドのアントリム州のスレミッシュ（Slemish）の地で羊の群れ（sheep herds）を追っていた。この奴隷期間に彼は信仰心を育てたと言われている。6 年後、彼は、Slemish を脱走し、船に乗り、20 歳の初めに故郷に戻った。彼は、ウェールズのグラモルガン（Glamorgan）の修道院長イルテュド（Illtud）（5 世紀に生まれ 6 世紀半没）の教育を受け、432 年にアイルランドにキリスト教の宣教のために着た。彼は、ダウ州のストラングフォード湖の近くのザウル（Saul）に上陸した。彼は、アイルランドの北と西で伝道と布教活動をした。現在のアントリム州、ダウ州、ミース（Meath）州、アーマー（Armagh）州およびマヨ（Mayo）州、ドネガル（Donegal）州にこの痕跡が見られる。またアイルランドにはパトリックに因んだ地名が多数残されている。例えば、リメリク（Limerick）州のパトリック・スウェル（Patrick Swell）、ダブリン州の聖パトリック島、マン島沖の聖パトリック島などの地名が残っている。彼の布教活動について、マヨ州のキララ（Kilala）では一日に 12,000 人を改宗させ、Croughpatrick の頂きで 40 日間断食をし、そこに教会を建て、その下山中に彼の銀色のベルを道端に投げて、悪魔を倒し、アイルランドから全ての蛇を追い出したと伝えられる。この山は巡礼の地である。彼は、ダウ州のアーマーに大きな教会を建て、そこを伝道と布教の中心にし、この教会で教育されたもののみが伝道者であると宣言した。彼の弟子にオルカーン（Olcán）（5 世紀）がいる。彼は、アントリムのアーモイ（Armoy）の創建者であり、聖パトリックによって洗礼を受けた。

429年頃に、ブリテンにガリア (Gaul) のオサア司教ゲルマニウス (Germanus, Bishop of Auxerre) (378年生? - 448年没?) を派遣した。彼は、巧みな修辞でペラギアン (the Pelagians) を敗北させた⁶⁵。このゲルマニウスのブリテン訪問と聖パトリックの関連性はよく分らない⁶⁶。431年には、ローマ教皇セレスティヌ (Pope Celestinu) によって、パラディウス (Palladius) (408年生? - 457年あるいは461年没) がアイルランド教会最初の司教に任命された。このパラディウスの働きと聖パトリックの活動が混同されて伝えられている。パラディウスの役割は、アイルランド人を改宗することではなく、異なるキリスト教がアイルランドに広まることを阻止することであったと思われる。彼の活動を支援した3人の同僚がいた。ダンショーフリン (Dunshaughrin)⁶⁷ の守護神であり、アーマー司教の聖ゼカンディウス (Saint Secundius) (5世紀に活動: 447年あるいは448年没)、アガデ (Aghade)⁶⁸ に教会を建てた聖イセルニヌス (Iserninus) (456年没)、そしてキラシー (Killashee)⁶⁹ 教会を建てた聖オジリアス (Auxilius) (459年没?) の3人がパラディウス (Palladius) のアイルランドの活動を支援した。3人は、主に、レインスターやマンスターなどのアイルランドの南部と東部にキリスト教の布教を行った。

聖パトリック達がアイルランドで布教したのに対し、6世紀にアルト・カルトにキリスト教を布教したのがローマ・カトリックの聖ヴァンゴ (Saint Mungo) あるいは聖ケンティゲルン (Saint Kentigern)⁷⁰ (614年没) であった。彼は、グラスゴウの創設者であり、その守

⁶⁵ ゲルマニウスは、北ウェールズの Mold でのピクト人とサクソン人との戦いでブリテン人を勝利に導いた。彼は、軍隊を洗礼し、Alleluia と叫ぶように命じた。その声に恐れた侵攻者は、戦わずして逃亡した。ゲルマニウスがブリテン軍を指揮した。これは、このときブリテン軍の指揮官がペラギアンであったのか、あるいは、彼ら自身がピクトおよびサクソン人であったと考えられる。また、聖ギルダス (Saint Gildas) (500年生? - 570年没) もその当時のブリテンの指導者を傲慢な専制者 (Proud Tyrant) と報告している。これがボルティガン (Vortigern) (5世紀初めから半ばに活躍した神話上の人物) と結びつけられている。この Mold での戦いは、ブリテンのローマへの忠誠を示す戦いであった見る歴史家もいる。

⁶⁶ ゲルマニウスがブリテンに派遣された後、ローマは431年にパラディウス (Palladius) (408年生? - 457年あるいは461年没) をアイルランドでの最初の司教に任命している。このパラディウスの働きと聖パトリックの活動が混同されて伝えられている。彼の役割は、アイルランド人を改宗することではなく、異なる教えがアイルランドに広まることを阻止することであったと思われる。パラディウスの同僚は、アイルランドの南と東で活躍した。

⁶⁷ この地は王家の中心地であった。現在のメース州 (County Meath) であり、その当時では南部イー・ニエル (Southern Ūi Néill) 王国にあった。

⁶⁸ この地は、アイルランド南東部にあり、現在のカルロー州 (County Carlow)、当時のラギン (Laigin) 王国にあった。

⁶⁹ この地は、アイルランドの中央に位置し、レインスター地方に位置している。現在のロング・フォード州にある。

⁷⁰ 聖ヴァンゴの出生の伝説を紹介しよう。彼は、父親ウリーン王の息子オーエン (Owain mab Urien) (595年没) と母親 Thenaw (あるいは Teneu) の子として生まれるが、私生児であった。オーエンにレイブされた Teneu の子として生まれるが、そのことを知った彼女の父親ロージアン王 Lleuddun は彼女をフォー

護神である。さらに、ストラスクライドのリデルホ王の守護神であった。リデルホ王は、彼にグラスゴーの土地を彼に与え、ストラスクライドに司教区を確立させ、聖ヴァンゴはグラスゴーでの最初の司教であった。そのリデルホ王は、聖ヴァンゴならびに聖コルンバ(521年生-597年没)と同時代人であった。聖コルンバは、ダル・リアダ王アイダーン王(在位574年?-609年)を支え、北ピクト人にキリスト教を伝え、布教した。聖コルンバはリデルホ王とは敵対する王国の守護聖人であった。聖ヴァンゴは、キルマコルム(Kilmacolm)あるいはその近くで聖コルンバの訪問を受けた。聖ヴァンゴは、25歳頃に、クライド(現在のグラスゴー)で布教活動を開始した。

彼は、彼の布教活動の初め、ビルネイフ(Bryneich)王国のモルガン(Morcant)王あるいはモルケン王によって、その王国での布教を阻止され、そこを立ち去ることを余儀なくされた。彼は、カンブリアを通して、ウェールズの聖デイヴィッド(Saint David)⁷¹(500年生?-589年没)を頼った。そこからグウィネズ王国に入り、ランリー(Llanelwy)に聖堂(cathedral)を建てた。そこにいるときに彼はローマ巡礼を行った。アルト・カルト王のリデルホ王は、キリスト教を保護・奨励し、聖ヴァンゴを彼の王国に呼び戻した。

聖ヴァンゴは、彼の代わりにランリー司教として聖アザフィー(Saint Asaph)(6世紀初期)を任命した。聖ヴァンゴは、ダンフリーズ州のホドム(Hoddum)に司教座を置いて、そこからギャロウェイ地域にキリスト教を布教する活動をおこなった。最終的には、彼は、Glus-gu(現在のグラスゴー)に戻り、そこで大きなコミュニティを成長させ、ストラスクライド王の大司教の位に留まる間に多くの教会を建てた。その中には、6世紀に建てられた聖ヴァンゴに捧げられたストボ教会(Stobo Kirk)⁷²があった。この教会はピーブルズ(Peebles)(現在のボーダー州;当時のピーブルズ州)の南西6マイルに位置している。彼の宣教活動は、ブリテン人を対象にされ、ストラスクライド、カンブリアおよびギャラウェイであったと思われる。

ス湾に投げ入れたが、懐妊中の彼女は、ファイフのグルロス(Culross)に流れついた。その子ヴァンゴは、聖ゼルフ(Saint Serf)(500年生?-583年没)によって育てられた。聖ゼルフは、ファイフの西部では崇拜され、また、オークニ諸島の伝道者と呼ばれた。レヴァン湖(Lough Leven)の聖ゼルフ島に修道院(Priory)が建てられている。

⁷¹ 彼はウェールズの守護神になった。彼はウェールズのペンブローック州のCaerfaiで生まれた。彼の宣教活動範囲はウェールズ、コーンウエル(Domnonia)およびブリタニアに及んだ。彼は、545年のブレフィアの宗教会議(Synod of Llanddewi Berfi)においてPelagianismを批判し、その後に大司教に聖別(任命)された。また、彼の修道院規定は、修道士に労働を求め、アルコールの摂取を禁止し、塩とハーブでパンを食べること、夕方には祈りと読書と書き物をするをもとめた。彼の規定は、アイルランドの聖コロンバヌスの修道院規定と同様に静かで質素な生活を求めている。

⁷² この教会で聖ヴァンゴがミルディン・ウィルト(Myrdiddin Wyllt;Merlin Sylvertris)を丸石の上でキリスト教徒に改宗させたという伝説がある。このMerlinはアーサー王伝説に登場する魔法使いで、GwenddonleuがArthuretの戦いで敗北し殺害された後に、森に逃げ込んだ予言者であり、狂人であった。

むすびにかえて

この稿では、アルト・カルト王国およびストラスクライド王国の勃興から、衰退・消滅までを概観した。この王国は、5世紀から7世紀の前半までは、ダル・リアダ王国、ピクト王国、ペルニシア（ノーザンブリア）王国、その他のブリテン人の王国（グウィネッツ王国、レゲット王国、あるいはエルメ王国などの王国）などと鼎立していた。そのためアルト・カルト王国ならびにストラスクライド王国は、周辺国の侵攻に悩まされた。これが、この王国の王権力の伸張を阻害した大きな要因であったと推測される。また、その他の要因として、この王国にはダル・リアダ王国のアイダーン王（Áedán mac Gabráin）（在位574年？-609年）、ノーザンブリア王国のアシルフリス（Æthelfrith）（在位593年-616年）、エドウィン（Edwin）（在位616年-633年）あるいはオズワルド王（Oswald）（在位634年-642年）などの王、あるいはピクト王国のオエンガス王（Óengus I）（在位732年-761年）などのような強い統率力のある国王（支配者）が出現しなかったこともある。これもアル・カルト王国およびストラスクライド王国が早い段階で歴史から消える要因になったと推測される。それでも、この王国は同時代で同じ地理的条件にあったと思われるレゲット王国やエルメト王国よりも他の王国による支配を遅らせた。その要因はなんであろうか。

アルト・カルト王国およびストラスクライド王国は、ノーザンブリア王国あるいはピクト王国に臣従し、それに従属し、8世紀後半にはピクト王国に支配されたと思われる。さらに、ヴァイキングの侵攻後には、強力な王権を持たないストラスクライド王国は、強力な王のもとで統治されたピクト王国の属国になった。強力な王権を持たないストラスクライド王国は、ヴァイキング侵攻で荒廃し、その侵攻後に強力な王のもとで統治されたピクト王国の属国とされ、11世紀にはピクト王国に併合されていたと推測される。本稿の最後に、アルト・カルト王国とストラスクライド王国におけるキリスト教の働きを一瞥した。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著（大塚久雄 訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
 スマウト, T. C. (木村正俊 監訳) 『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
 アダム・スミス 著（大内兵衛・松川七郎共訳）『諸国民の富』（四） 岩波文庫 1992年4月
 ジェフ・デランティ 著（山之内靖・伊藤 茂 共訳）『コミュニティ』NNT出版 2007年4月
 David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
 ジョン・ロック 著（鶴飼信成 訳）『市民政府論』岩波文庫 1971年1月
 ジョン・ロック 著（加藤 節 訳）『統治二論』岩波文庫 2010年12月

（くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻）